坪田譲治全集

4

新潮社

坪田譲治全集 第四巻

印刷 昭和五十二年十二月十五日
発行 昭和五十二年十二月二十日
著者 坪田譲治（つぼたじょうじ）
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京（〇三）二六六―五一一一 業務部
二六六―五四一一 編集部
振替番号 東京四―八〇八
印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社
定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© JÔJI TSUBOTA Printed in Japan 1977

坪田譲治全集 第4巻 目次

子供の四季　七

短篇小説（昭和14年～昭和26年）

兄を描く　二五六
牧場の春　二六九
牧場の夏　二八六
花と牛　三〇三
牛と馬　三二四
記念碑　三三六
弱気地獄　三三一
老年礼讃　三三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

*
あとがき　坪田譲治　三四三
編集後記　三四九

（箱カット・中尾彰）

坪田譲治全集 第4巻（小説四）

子供の四季

春

「気を付けえッ。前へーおいッ。」

子供達は三平の家の門前で列び、三平の号令で出発した。銀チャンが先頭でラッパを吹いた。四月中ば、朝七時、方方の山の上の畑には桃の花が咲いていた。

「プップップ――、プップップ――」

兵隊さんが一人街道を馬でやって来て、河原の方に下りてったというので、今、子供達は勇ましく行進してゆくのである。部隊総員五名、竹の鉄砲をかついだり、腰にさしたり、軍刀のように肩にあてているものもある。

ところで、小川に沿うてやって来て、大川の土手に登って見渡すと、河原には五六頭の牛がねそべって、よだれを垂らしているばかりである。いやいや、そこからずっと離れた処で、一頭の馬が背中に鞍を乗せたまま、俯向いて草を喰っていた。大きな茶色の馬である。兵隊さんの姿は見えない。

「突貫――ッ。突込め――ッ。」

兵隊さんはいなくても、斯うなっては突撃以外にみちはない。ワーッと、みんなは河原に向って駈け下った。だけども、

「あれえッ。」

馬の側まで行って見たのに、何処にも兵隊さんは見えないのである。キョロキョロ四方を見渡した末、

「散れえッ。散ってさがせーいッ。」

の号令で、みんなは四方に散って行った。一人は草を飛び越え飛び越え、棒を空中に振って、おどるように突進したし、一人は草の頭をやっやっと右や左に打ち据えながら突き進んだ。

「へいたいさーん。」

と口に手をあてて呼ぶものもあった。然し兵隊さんは何処からも出て来なかった。遂に子供達は乗り乗てられている馬の側に集まって、口々に評議をこらした。

「どうも、こりゃ怪しい。兵隊さんではないんだぞ。」

言うものがあった。

「だって、この馬具を見ろい。将校馬具だぞ。」

三平が言った。と、これについて、銀ちゃんが言ったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

である。
「もしかしたら、悪ものがあってさ、兵隊馬を盗んでさ、それでここ迄逃げて来てさ、ねッ、それから河を渡って、何処か彼方へ行ってしまったのかも知れないぞう。」
「ええッ。」
これを聞くと、亀吉は顔色を変え、もう四辺(あたり)を見廻して不安な様子を見せる。
「そんなことあるかーい。」
五郎は激しく口をゆがめて、その意見に大に軽蔑の意を表する。銀チャンに挑戦するのである。然し、
「兎に角もう一度ラッパを吹いて見よう。兵隊さんだったら、きっと出て来るよ。兵隊さんだもの、ねえ。」
鶴二郎が言った、そこで銀チャンがラッパを口にあてた。みんなは周囲に輪をつくった。プップップ――、プップップ――。これにつれて、頭をゆすったり、足ぶみをしたり、はては兵隊さんが何処かから出て来はしないかとグルグルグルグル身体を廻したりした。そしてその内みんなは疲れてしまった。と、
「あれッ。」
銀チャンが首を傾けながら歩き出した。向ってゆく処は河原の遠い片隅、高い一団の草の茂った処である。そうだ。そこから一本の長靴の先が見えている。拍車が日に光っている。近くまで駈けて行った銀チャンは、草の側からぬき足さし足、首を延ばして、草の中を覗き込む。みんなも知らず知らずぬき足さし足、首を延ばして、そちらを注目する。
「おいおい。」
そこへ駈けて帰った銀チャンが声をひそめて報告したのである。
「変なお爺さんがねているんだぞう。ウンウン呻ってやがるんだぞう。」

河原の隅の草の中で、変なお爺さんがウンウン呻ってねているというので、子供達は大騒ぎを始めた。行き倒れだと、一人は穢いもののように言ったが、老人を覗いて来た銀チャンの報告によれば、お医者さんちのお爺さんのように白髯を垂らし、白手袋の手には革鞭さえ持っているというのである。
「フーン。じゃ、やっぱり馬に乗って来たんだな。そして馬から落ちたんだな。」
「ウーン、馬に蹴られたんだよ。」
「そうだ。馬に腹を蹴られたんだよ。腹を蹴られたら、死んじまうんだそうだよ。」
「ほうだ。きっと死ぬな。だって歳よりだもの。ねえ。」
こんな有様で、評議はつきない。然し誰一人お爺さんを

見舞って、それを確めるものはない。隊長である三平の顔を見るばかりである。そこで三平は歩き出した。然し草のところへ来ると、彼とてもぬき足さし足。それでみんなも真似をして、二三間後からぬき足さし足、腰を屈めて、一列になってついてゆく。

「おじいさん。」

小さい声で呼んだのは、三平ではなかった。後の方のイタズラ小僧だ。それなのに、今迄草の中に長くのびて、フウーッ、フウーッと吐息をついていた老人が、その声で半身を起した。

「ホウ、大勢来ているな。」

これに驚いた子供達は、一層身体を屈めて、互の後へ後へと身を隠した。仕方なく三平だけが立ち向った。

「お爺さん、どうしたんです?」

「おお、有難う、有難う。先刻馬から下りる時な、足のクルブシを捻挫してな。」

斯う云いながらも、お爺さんは痛そうに額に皺を寄せる。

「誰か大急ぎで、メリケン粉を酢でねって持って来てくれないか。」

みんなはまた顔を見合せた後、三平にその目を集める。

「ボク持って来ようか。」

「ウン、頼む頼む。」

そこで三平は家に向って走った。大変なスピードだ。後に従う連中も、暁の超特急のような速力である。

「お母さん、大変だ。」

三平は玄関に駈け込むと呼んだ。

「えッ、どうしたの。」

「ウウン、今、河原で足をくじいた人があるのさ。小麦粉を酢でねって来てくれって。大急行だよ。だって、その人ウンウン呻ってもう死にそうなんだよ。」

そんな調子で、捻挫ならこの方がいいだろうとイヒチオールを渡された。そこで三平は後に土煙を立てて従う部隊を引きつれ、また河原をさして帰って来た。

「お爺さん、とって来ましたあッ。」

「ホホウ、こりゃイヒチオールだ。紙もヘラも、繃帯まで添えてある。」

老人は靴をぬいで、足首に黒い薬をぬる。繃帯をして、目をつぶる。

「気のせいか、随分軽くなったようだぞ。」

老人の微笑を見ると、三平が突然言ったのである。

「ボク、馬に乗りたいな。」

「馬に乗りたい? ホッホ、ホッホウ。」

老人は大喜びして笑い出した。彼は馬が大好きなので、斯う言う子供まで好きになる。

「乗せてもいいが、まだ少し危いな。まず馬を引いて歩きなさい。」
それで、三平は馬の処に行って、首にぶら下った手綱をとり、嬉しそうにニコニコしながら、河原の草の中を歩き廻った。子供達も後になり、先になりして歩いて廻りながら、
「今度はボクに持たせてくれよう。」
などと言うのであった。

河原の草の上を、馬の手綱をとって、三平達は引張り廻した。片隅の草の中から老人は眼を細くして、これを眺めていた。馬好きの彼はこの光景だけで、捻挫した足の痛みが薄れてゆく思いがした。そこへ三平達が馬を引いて帰って来た。まず三平が言う。
「お爺さん、この馬、随分おとなしいんですね。」
「ハアハアハアハア。」
老人は上機嫌の大笑い。
「ボク、乗って見ようかなあ。」
「フウフウフウフウ。」
これも老人の笑声である。彼はもう三平を乗せる気になっていた。馬を好くものは、直ぐ自分でも好きになるのが老人の性質(たち)であった。馬を手の届く処に引いて来さすと、その轡をとって立ち上った。手綱をとって、鬣の上に投げ上げる。
「さあてな、足が痛いかな。」
そう言いながら、老人は繃帯してない左足を鐙の上に上げようとした。
「タタタタタ。」
これを見ると、三平が言った。
「お爺さん、ボク達で押し上げたげましょう。おい、みんな来い。」
子供達は集まり、老人の足を持ち、尻を押した。ワッショ、ワッショ。ウーン、ウーン。
老人は鞍の上に押し上げられ、ハアハア、ハアハアと大笑いである。鞍の上に跨ると、
「さあ来い。乗せてやるぞう。」
みんな顔を見合せたが、やはり三平の優先権が認められ、
「それ、この手につかまって——」
と、老人の出した手につかまると、友達が総がかりで、尻を押し上げた。老人の前に跨って、ニコニコすると、みんなも思わず、
「バンザーイ。」
と手を上げた。そしてまた二人が乗ってゆく馬の前後を何か口々に呼びながら、戦争のように棒を振って駈け廻っ

た。老人はその間を馬上静かに河原を一廻りし、一周が終ると、
「さあ、シッカリ鞍の前を摑んでいるんだぞ。少し走らせて見るからね。」
老人は舌を鳴らせた。手綱をしゃくった。馬は軽く駈け出した。
「やあ、競走競走。」
子供達は大騒ぎだ。馬は牛のねている周囲を廻ったり、河の水の浅い処へ入って行ったりした。ザブザブ、水沫が飛び散った。ところが、その時、土手の方から三平の兄善太の声が聞えて来た。
「オーイ、三平チャン――」
「三平くん、善チャンが呼んでるぞう。」
老人は馬をとめた。三平はすべり下りた。土手の方に走ってゆく。
「何だい。兄チャン。」
「お父さんが帰って来いって、馬なんかに乗せて貰っちゃいけないって。」
「ええ、つまんないなあ。」
三平は今迄味わったこともない喜びの中にあった。不平満々で家に駈けつけた。
「お父さん――、何で馬に乗っちゃいけないの。」
お父さんはむずかしい顔をしていて、お母さんがとりなすように言うのである。
「三平チャン、どんな人に乗せて貰ったの。」
「ウン、髯の長い、洋服のお爺さん。」
「フーン。」
「どうしたの。」
「何でもないけど、馬は危いからね。もうその人が乗せてやろうたって、乗せて貰うんじゃありませんよ。」
「ウン。だけど、その人悪い人？　母さんの知ってる人？」
「いいえ。」
然しどうも三平には解らない。こんなことをお父さんお母さんが言ったことは一度もない。スゴスゴ街道の方へ出てゆくと、お爺さんはもう馬に乗って町の方へ帰っていた。
馬に乗って、河沿いの峠道を、町の方へ帰ってゆく老人を、三平は遠くから見送ったのである。何しろ、不思議な老人である。
「お爺さん――」
と呼んで見ようかと思ったけれども、お母さんの言葉は老人に近よってはならないことを暗示していた。それで、お爺さんが峠を彼方へ越して、見えなくなる迄、三平は街道に立っていた。帰って来ると、兄の善太がお母さんに話

していた。
「お母さん、馬のお爺さんがイヒチオールを返しましたよ。お礼を言ってくれって。それからこの次の日曜、三平にお土産を持て来てくれるって。」
「へええ、お爺さん、何も知らないからねえ。」
この言葉は三平の注意をひかずに居らなかった。
「え、お母さん、お爺さん何を知らないの。」
「いいえ、知らないお爺さんから、お土産なんか貰えないって言うんですよ。」
どうも不思議なことがあるらしい。裏へ行って、柿の木の下で一人考える。
「あのお爺さんは良いお爺さんか悪いお爺さんか。」
頭を傾けて、口でブツブツ言っていると、そこへ善太がやって来た。
「兄チャン、あのお爺さん、だあれだッ。」
「だあれだ？　よそのお爺さんじゃないか。」
「ボク、思うな。」
つい二三日前、三平は学校で書いた綴方のことを思い浮べていた。――ボク達にはお爺さんもお婆さんもありません。お爺さんやお婆さんがあったらいいと思います。――然し言うことは躊躇された。
「どう思うんだい。」
善太は催促した。
「ウン、あの人はお爺さんの匂いがしたんだ。お爺さんの匂いって、いい匂いだよ。」
実はボク達のお爺さんのような気がしたと言いたかったが、そこ迄は言えなかった。と、「バカッ」と言いすてて、善太はもうお母さんの方へ駈け出した。
「お母さん、三平はねえ。」
これを聞くと、三平は恥しさと怒りとが、一度に顔にのぼって来た。真赤になって、善太の後を追いかけ、その肩に飛びかかった。何てことを言ってしまったんだろう。先を兄チャンが言わない間に、組打ちでやっつけなければならない。それで激しい取組合いとなったのである。
「なんです！　またッ。」
お母さんに叱られると、
「だってさ。」
善太が言えば、三平も言う。
「だってさ。」
「もうよしなさいッ。」
二人は離れたものの、三平が見れば、固く結んだ善太の口から兎もすれば笑いがもれそうになっている。そこで遂に三平が挑戦した。
「やいッ。」

「何だい。」
斯くは言うものの、善太は堪らない言いたさに、
「弱ったなあ。」
と、吹き出してしまった。そしてまだかかって来そうな三平に、
「言わないよ。言わないよ。言わないからいいじゃないか。」
と、笑いを堪えながら、そこを立去った。然し三平がいなくなると、ソッと、お母さんの処へやって来て、告口をしたのである。
「お母さん、馬のお爺さんね、三平はお爺さんの匂いがしたって言ってるのさ。とってもいい匂いだって。」
「まあ、そんなことを。」
大笑いするだろうと思ったお母さんが、予期に反して、感慨深い表情をしたのである。

馬の老人のことで、善太と三平が取組合いをやったその夜のことである。子供達が寝しずまった後、お父さんとお母さんが話を始めた。
「ね、あなた、どうしましょう?」
「何を?」
「何をって、小野のお爺さんのことですよ。」
「別にどうもしなくたっていいだろう。」
「だって、変じゃありませんか、それに三平も可哀想ですよ。今日なんか、お爺さんの匂いって、とてもいい匂いだなんて言ってるんです。馬に抱き乗せられた時、血が知らせたんですよ。」
これを聞くと、お父さんは暗い顔をして黙ってしまった。そこで、作者は種明しをしなければならない。馬の老人はこのお母さんの父、三平の祖父であった。祖父であるのに二人は何故互に知っていないか。三平の父母がこの小野老人と義絶という事になっているからである。十幾年も昔、三平のお母さんがお父さんと結婚したことが、お爺さんの怒りを買った。その頃、お父さんはお爺さんの綿布工場に勤めていた。同僚に老会貞三という男がいた。青山一郎が老人の娘と結婚しそうな様子を見ると、奴は赤いんですよと、中傷した。その時以来、三平の一家にこの不幸が生じ、大阪や東京を転々した後、この郷里に帰って来た。五六匹の牛を飼って、牧場即ち牛乳屋を始めてから十年ばかりである。老人には三平の母以外に子供はなかった。だから、七十幾歳になり、少しく心が弱りかけていた。でも、日露戦争に騎兵大尉で出征したという彼は頑固一徹が自慢で、外面には微塵の弱みも見せなかった。それで、青山一家との仲直りをとりなすようなものは一人もなかった。言い出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.